

■はじめに

「核兵器は地球を守れるか？」——残念ながら、現在の私には最新の国際政治の知見を駆使してこの問いを論じる力はまだない。だが、78年前に戦争を経験した方々は高齢化が進んでおり、いつかはいなくなってしまうとても貴重な存在である。今回被爆体験をされた方の語りを聞くために、仲間を募り長崎を訪問した。その貴重な存在を感じることができ、戦争の記憶を次世代へとつなげる使命感を感じた。本論では、ささやかながらも被爆地の記憶の伝承という若者である私の等身大の視点から、核なき未来の糸口を構想してみたい。

■ある少女との出会い

私は今年、初めて戦争について関心のある仲間たちと共に長崎県を訪れた。そこで出会ったある1人の少女の言葉がきっかけとなり、私は戦争について次世代へと継承するべきであると考えた。「ねえパパ見て、綺麗だね」この言葉は、長崎の原爆資料館に展示されている『手の骨とガラス』を見た少女が放った言葉だった。なぜ少女はそれが綺麗だと感じたのだろうか。正直今の私には美しいものとは思えなかったが、もし私が少女と同じくらいの年齢の時にそれを見たら同じように感じたのかもしれない。

原爆資料館で「美しい」という言葉が出るなんてと思う人もいるかもしれないが、美しいと感じたものは決して封じ込められるべきではない。少女はこれからどのように戦争について学んでいくのだろう。少女が大人になった時は、『手の骨とガラス』を見て幼少期と変わらず自分のそのままの思いを人に伝えられる世の中になっているであろうか。

今日本の戦争について学ぶとなると、「広島にくらべて存在感のない長崎」（高瀬 2009, 252）のように、広島と長崎は比べられてしまう。そして戦争に対する思いを伝えるとき、暗黙の了解のようにみな言葉に気を遣う。私は長崎を訪れて、戦争は決して比べるものではないということを感じるとともに、少女の純粋な思いを否定せず次世代へと戦争の記憶を伝承しなければならぬという責任も感じたのだ。

■被爆体験者の思い

では、次世代はどのようにして戦争の記憶を受け止めるのだろうか。人間は味覚、聴覚、視覚、嗅覚、触覚の五感をかね備えており、嗅覚が最も記憶に残りやすいと言われている（箱田 2020）。私は原爆資料館のあの独特な匂いは今でも覚えているが、その匂いは目で見たことや耳で聞いたことと共に記憶に残っている。しかしこの感覚を人に伝えるとなると「言葉」しか手段はないのだ。また、被爆体験者という存在がいなくなってしまうたら、次世代には戦争についても「言葉」を用いて伝えられる。私は長崎を訪れた際に、現在語り部として活動されている被爆体験者からお話を聞く機会もいただいた。語り部というお仕事も「語り」と書かれるように五感全てで経験したものを言葉で伝えるのである。

その方のお話によると、被爆した方々はみな自分が被爆者であることを隠していたという。「被爆者と結婚すると、おかしい子どもが生まれる」という差別があったようだ。広島と長崎で被爆した方々の思いが綴られた本にも、やはり被爆者であることをなかなか打ち明けられなかったと話している方がたくさんいた。その中の1人である真村信明さん（仮名）は、ある新聞記者に「別に隠さんでも恥にはならんから」（京都「被爆2世・3世の会」編 2020, 436）と今まで家族に「隠せ」と言われていたこととは正反対のことを言われ、その一言が被爆を語るきっかけにもなったという。

自分の人生や運命を否定されることなく生きていける喜びは、それだけ辛い経験をされた方だけが感じることができると思う。戦争という経験を経て感じることもできた喜びは、どのようにして次世代へと伝えられるだろうか。私たち若者はそこを追求していく必要がある。

■さいごに

ここでは原爆資料館で出会った少女、私、そして被爆体験者という三世代の視点から核なき未来へのそれぞれのあり方について述べてきた。被爆体験者の方々は自分たちの経験を憎みながら恨みながら伝えるのではなく、「若者たちに日本では昔何が起きたのかを知ってほしい」

「私たちが最後の被爆者であってほしい」という思いが込められているように感じた。ただの経験談ではない彼らのお話を直接感じることができる私たち若者世代の役目は、資料館にいたあの少女のような次世代へと引き継ぐことである。だが伝承の仕方は世代によって変わり、永遠に問い続けられるものだと私は思う。次へ次へとその世代を生きる若者たちが戦争の継承の仕方について考え、伝え続けてほしい。

参考文献

高瀬毅 (2009) 『ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」』 平凡社
京都「被爆2世・3世の会」編 (2020) 『語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心』 ウインかもがわ
箱田高樹 (2020/9/30) 「脳科学から考える、ビジネスにおける五感に響く体験の効果とは？」 (https://insights.amana.jp/article/23806 2023年7月25日アクセス)